

そもそも端午の節句とは、五月の端（はじめ）の午（うま）の日、つまり「端午（たんご）」に由来するといわれ、災厄や疾病を払う力があるとされた菖蒲が咲く季節でもあり「菖蒲

の節句」とも呼ばれている。古代中国では「午」と「五」は同音であり、五月最初の五日の日を意味し、蓬の人形や菖蒲を門に飾ったり菖蒲酒を飲んだりして、邪気とくに疫病を祓う習俗があっ



板柳町での再現による菖蒲打ち
(県史編さん民俗部会・櫻庭俊美氏撮影)

た。また、汨羅（べきら）の淵に身を投げた屈原（くつげん）の故事にならって、粽（ちまき）を食べた。それが古代日本に伝来し、貴族社会にも受け入れられ、やがて民間にも広まったとされている。

その一方で、民間には、五月が田植え月であることから、この日に神祭りや物忌（ものいみ）をする行事

があるが、男の子の祭りというイメージは、中世以来の武家社会で「菖蒲」を「尚武」と読みとり、とくに江戸時代に入ってから職や武者人形を飾って男児の健全な成長を祈る日となり、定着したものである。

日に、家の軒にシヨウブとヨモギを差した。また二尺ほどのわらにシヨウブとヨモギをくるんで細縄で縛り、半尺ほど残したしっぽをつかんでモグラ打ちをした。」とある。森山泰太郎著『日本の民俗 青森』によれば、南部では四日の前節句に、夕方、菖蒲・蓬を屋敷内の建物の入口にさし、その後は家の者は五日の朝食が済むまで外出できなかつたという。先に述べた「女の家」の習俗をうかがわせる。また、菖蒲打ちについても、津軽では子供達が田畑の畝や家の回りを打って歩くと、稲の根つきがよくなくなるともモグラが畑の土を掘らぬともいう。

端午の節句の主役は？

清野 耕司

（県民生活文化課

県史編さんグループ

主幹）

もあった。例えば、五月四日の夜に、屋根に菖蒲を葺いた家に女性がこもる「フキゴモリ」「女の晩」「女の家」などと呼ばれる習俗で、これを柳田国男は、田の神の奉仕者である女性達が、宵節句の一夜だけは男性を排除して特定の家にこもり、神とともに食事をする物忌の日と推測している。

端午の節句の主役は女性だったとするのは性急に過

だ。また、汨羅（べきら）の淵に身を投げた屈原（くつげん）の故事にならって、粽（ちまき）を食べた。それが古代日本に伝来し、貴族社会にも受け入れられ、やがて民間にも広まったとされている。